

循環する眠りと歴史

——『バーナビー・ラッジ』における「眠り」について——

渡 部 智 也

1. 序

チャールズ・ディケンズ 5 作目の長編小説『バーナビー・ラッジ』は、ゴードン卿の騒乱という歴史的事件を扱った、ディケンズ初の歴史小説である。¹⁾ この作品についてよく言われることは、ディケンズがゴードン卿の騒乱というおよそ 60 年も昔の出来事を描きながらも、実際は執筆当時に行っていた、チャーティスト運動の描写を行っていた、ということである。²⁾ 例えばエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) は、騒乱を描写する際「明らかにディケンズの頭にあったのは、チャーティスト運動のことだった」(Wilson 18) と述べ、スティーブン・マーカス (Steven Marcus) もまた、ディケンズが「ゴードン卿の騒乱に参加した群集と、1830 年代後半のチャーティスト運動に参加した人々との類似を意図的に示唆していた」(Marcus 172) と主張している。この事実は、ディケンズが歴史の循環性を感じながら本作を書いていたことを示唆していると言えるだろう。実際、多くの批評家は作品中に見られる歴史の循環性について指摘している。例えばジョン・ボウエン (John Bowen) は、この小説においては「歴史は繰り返しを起こすものであり、また奇妙に二重になった事柄である」と述べた上で、「差しつかえなく物事が進んでいく代わりに、本作では物事が何度も繰り返される」と論じている (Bowen xvi)。一方、ジェームズ・R・キンケード

(James R. Kincaid) は小説の最後の場面を取りあげ、「ジョーがメイポール亭を再開するとき、それはあたかも彼が物語を再び始めるかのごときである」(Kincaid 131) と述べて、作品の持つ循環性を示唆している。矢次綾もまた同じ場面について、ジョーとドリーの子供たちが“small Joes and small Dollys” (632) と呼ばれている点に着目し、これは個人的なレベルでのディケンズの循環的な歴史観の表れであると述べている (矢次 11)。この指摘も含め、矢次は『バーナビー・ラッジ』における変化と不変—歴史小説家としてのディケンズ』の中で、ディケンズが循環的な歴史観を持っていたという主張を行っている。このように、ディケンズが本作で歴史の循環性を描こうとしていたことはまず間違いがない。

この循環性、あるいは繰り返しを描く上で、重要な役割を果たしていると思われるのが、眠りの描写である。というのも、本作には主要登場人物や一般の人々の眠りと関わる表現が「繰り返し」用いられ、しかもそれが作品の中心であるゴードン卿の騒乱と密接に結びつき、ディケンズの描く歴史の循環性と深いつながりがあるように思われるからだ。『バーナビー・ラッジ』はディケンズ主要作品中、眠りと関連した言葉の使用回数が二番目に多く、また頻度も二番目に高い作品であるが、³⁾ 眠りの描写はただ単に多だけでなく、循環を感じさせるパターンの下に描かれている。そこで本稿では『バーナビー・ラッジ』における眠りの描写を物語の流れに沿う形で考察し、ディケンズの眠りの描写が暴動の進展と関連し、ディケンズの循環的歴史観を伝える上で重要な役割を果たしていることを示す。

2. 暴動前の眠り

この章では、作品中でゴードン卿の騒乱が起こる以前の眠りの描写の特徴について考察したい。物語はその中心的な位置を占めるメイポール亭の1775年段階における描写で幕を開ける。

With its overhanging stories, drowsy little panes of glass, and front bulging out and projecting over the pathway, the old house looked as if it were nodding in its sleep. Indeed it needed no very great stretch of fancy to detect in it other resemblances to humanity. (4)

ここでディケンズは“drowsy”、さらには“nodding in its sleep”という表現を用いて、この老宿屋を眠る老人にたとえている。つまり、読者は作品の冒頭から眠りのイメージを与えられるのである。このイメージは、その後登場する宿屋の主人ジョン・ウィレットへとつながってゆく。彼は妙な睡眠癖を持った老人で、“a burly, large-headed man with a fat face, which betokened profound obstinacy and slowness of apprehension, combined with a very strong reliance upon his own merits” (5) と描かれる人物である。ここで、彼の主要な特徴として「ひどく頑固」とあるように、ジョンは非常に頑なで、あらゆる変化というものを嫌っている。その典型が、息子ジョーの成長を無視しようとする態度である。ジョンは、ジョーが“a broad-shouldered strapping young fellow of twenty” (8) であるにもかかわらず、彼のことを“a little boy” (8) とみなし、彼の成長を認めようとしなない。その上、ジョーが家出をした際には尋ね人の張り紙で息子のことを“young boy” (252) と表現し、しかも「身長を18インチから数フィート、実際よりも低く」(“being from eighteen inches to a couple of feet shorter than he really was”; 252) 記したのである。ジョンがジョーの成長という変化を嫌い、無視しようとしているのは明らかである。

この変化を嫌い、無視しようとする態度が、彼の奇妙な睡眠癖の描写に現れている。彼は駅馬車の時間になると居眠りをする習慣があるのだ。

He made a point of going to sleep at the coach's time. He despised gadding about; he looked upon coaches as things that

ought to be indicted; as disturbers of the peace of mankind; as restless, bustling, busy, horn-blowing contrivances, quite beneath the dignity of men [...]. (198-99)

彼が睡眠という非常に不活発な行為を巧みに利用することで、駅馬車を無視しようとしていることは注目に値する。彼の持つ駅馬車に対する否定的な印象を表わす際に、“gadding”、“restless”、“bustling”、“busy”といった言葉が使用されていることから明らかなように、彼が駅馬車を嫌うのは、それが活発に動くものだからである。駅馬車というものはある場所から別の場所への移動を行うものであり、彼は移動や変化を象徴する存在として、駅馬車を嫌っていると考えることが出来るだろう。斎藤九一もまた彼の駅馬車への嫌悪と、彼が息子の成長を無視しようとしていることとを結びつけ、この場面を彼の変化を嫌う性質を表わすものであると論じている（斎藤 17）。このように、彼の眠りは彼の変化を無視する態度と結びつくのである。

一方、彼と同じ名前を持ち、同じく人の親であるジョン・チェスターの眠りもまた読者に強いインパクトを与える。ジョン・チェスターは、紳士らしい立居振る舞いの裏で策略をめぐらし、金持ちの娘と結婚させるために息子エドワード本人が望む結婚を妨げたり、暴動を裏で操ったりとあらゆる悪事を行う徹底的な偽善者である。このような人物の眠りは、以下のように描かれている。

With that he fell into a quiet slumber: — subsided into such a gentle, pleasant sleep, that it was quite infantine. [Chapter changes here].

Leaving the favoured, and well-received, and flattered of the world; him of the world most worldly, who never compromised himself by an ungentlemanly action and was never guilty of a manly one; to lie smilingly asleep — for even sleep, working but little change in his dissembling face, became with him a piece of

cold, conventional hypocrisy— [...]. (189)

チェスターは眠る際、表情を全く変えずに笑みを浮かべて眠っている。その眠りが「冷たく、因習的な偽善の一部」と表現されていることから明らかなように、彼の眠りは彼の偽善性をはっきりと映している。加えてこの場面の直前、彼は鍛冶屋の徒弟サイモン・タパーティットの訪問を受け、その際には穏やかな表情を作ることで、このような身分の低い者の訪問を嫌う気持ちを隠し、彼を騙している。その出来事の直後にこの眠りが描かれていることで、彼の眠りの持つ偽善性はより強調されているのである。

偽善者の彼らしく、チェスターは裏でジプシー女に子を産ませている。それがメイポール亭の馬丁ヒューである。ヒューの眠りは作品中でもっとも多く描かれ、その眠りは非常に読者の目に付く。その中でもとりわけ特徴的な眠りのシーンが二つある。一つ目は、ヒューが初めて詳細に描かれる場面である。

The light that fell upon this slumbering form, showed it in all its muscular and handsome proportions. It was that of a young man, of a hale athletic figure, and a giant's strength, whose sunburnt face and swarthy throat, overgrown with jet black hair, might have served a painter for a model. Loosely attired, [...] he had fallen asleep in a posture as careless as his dress. The negligence and disorder of the whole man, with something fierce and sullen in his features, gave him a picturesque appearance, that attracted the regards even of the Maypole customers who knew him well, [...]. (88–89)

H. K. ブラウン (Hablot Knight Browne) の挿絵もあって、この場面は非常に読者の心に残りやすい。ここで眠る彼の姿からは、一種のダイナミズムが感じられるだろう。⁴⁾ 周りを気にかけず豪快に眠るという彼の態度が、彼

の筋骨たくましい姿がかもし出す肉体的な力をより一層強調し、酒場の客の視線を普段以上に引きつけているのである。しかしそれと同時に、この彼の眠る姿からは何か危険なものも感じられる。実際、眠る彼を見た常連客の一人フィル・パークスは、“Hugh looked more like a poaching rascal to-night than ever he had seen him yet” (89) と述べている。“more like” という表現が示すように、ヒューは普段から「密猟する悪党」のように見えるのであるが、豪快に眠る姿が、余計にそのような邪悪な印象を強めているのである。

一方、もう一つ場面は、チェスターの家で眠りこけるシーンである。彼はチェスターが自分の父親だと知らずに彼のスパイになり、貴重な情報を提供していた。ある夜チェスターが家に帰ると、ヒューが家の階段部分で眠り込んでいるのに出くわす。

It was the heavy breathing of a sleeper, close at hand. Some fellow had lain down on the open staircase, and was slumbering soundly. [...] there lay Hugh, face uppermost, his long hair drooping like some wild weed upon his wooden pillow, and his huge chest heaving with the sounds which so unwontedly disturbed the place and hour. (215)

ここに全てを引用したわけではないが、彼の眠りを表わす“sleep”、“slumber”といった言葉がこの前後で10回も用いられており、それが読者の注目をヒューの眠りに向けさせている。そしてここでも眠りが、彼のたくましい肉体をより際立たせている。彼はチェスターによって目を覚まさせられると、ドリーがエドワードの恋人エマに宛てて書いた手紙を差し出し、スパイとしての役割を果たす。その後ヒューを追い払い、チェスターは眠ろうとするが、突然ヒューがまだ階段で眠っているのではないかという不安に襲われ、彼がいないか確かめに行く (“[He] opened the door, and looked out upon the staircase, and towards the spot where Hugh had lain

asleep; and even spoke to him by name”; 219)。実際にはヒューは既に館を出ており、チェスターは安堵して眠り込むが、あの眠りながら笑みを浮かべていたチェスターが、その眠りをかき乱されたという点は注目に値するだろう。これらのヒューの眠りに共通しているのは、彼の眠りが彼の持つ力を強調し、見るものに不安を与えているということである。彼は、暴動が始まると暴徒のリーダーとして積極的に破壊活動に従事するような、非常に危険な男である。したがって、彼の眠りは彼の持つ潜在的な危険性を象徴的に示していると言えよう。

何か邪悪な力を感じさせるヒューは、その動物的なイメージとも相まって、多くの人間に嫌われている。そんな中で唯一友人と呼べるのが、本作の主人公バーナビー・ラッジである。バーナビーの眠りもまた読者にとって印象的である。彼は生まれながらの白痴であり、頻繁に他の人には意味の分からないことを口走る。そのような彼の言動の一つが、彼の眠りと関わっているのである。

‘I [Gabriel Varden] thought you had been asleep.’

‘So I *have* been asleep,’ he rejoined, with widely-opened eyes. ‘There have been great faces coming and going — close to my face, and then a mile away — low places to creep through, whether I would or no — high churches to fall down from strange creatures crowded up together neck and heels, to sit upon the bed — that’s sleep, eh?’ (50)

眠っているのかと思った、と述べるヴァーデンに対し、バーナビーは自分にとっての眠りとは何かを説明する。しかしこの説明を見れば分かるように、これは眠りと呼ぶより悪夢と呼ぶべきものである。ヴァーデンも同様のことを感じ、それは夢だと論ずるが、それに対し、夢とはもっと別のものだと言及バーナビーは反論する。

'I dreamed,' said Barnaby, passing his arm through Varden's, and peering close into his face as he answered in a whisper, 'I dreamed just now that something — it was in the shape of a man — followed me — came softly after me — wouldn't let me be — but was always hiding and crouching, like a cat in dark corners, waiting till I should pass; when it crept out and came softly after me. (51)

何者かに後をつけられる、という彼の夢は、多くの顔がうじゃうじゃと自分の周りに群がってくるという彼の眠りと同様とても不気味で、一見しただけでは彼の白痴的言動の一部としか思えない。しかし、彼がなぜ生まれながらにして白痴なのかという問題を考えると、これらの言動の裏側にあるものがより明瞭に見えてくる。その原因とは、彼の父親の犯罪である。彼の父ラッジは物語が始まる 22 年前に二つの殺人を犯し、その後逃走し続ける殺人者である。殺人を犯した夜、彼はそのまま家に帰り、妊娠中の妻にその事実を告げる。夫の恐ろしい犯罪を聞いた妻は必死でその血塗れた手首をつかみ、彼との縁を切ると宣言した上で、彼を逃がす。その夜、彼女は早産で子供を生み、それがバーナビーだったのである。そして彼の手首には、父の罪を象徴するかのごとく血のような赤いあざがついていた。これらの事情から、父の犯罪が彼を呪い、白痴にしてしまった、と考えられるだろう。実際、ラッジは物語が始まった段階でもまだ逃走中であり、常に追っ手に追われているという恐怖感に苛まれている。この事実は、何かの後をつけてくるというバーナビーの夢を連想させ、彼の夢とラッジの犯罪が密接に繋がっていることをはっきりと示唆している。このように、彼の眠りや夢はその父の恐ろしい殺人行為を反映しているのである。

ここまで扱った人物たちの眠りは皆、彼らの良くない特徴（変化を認めない態度や、偽善性など）を映す鏡の役割を果たしていた。しかし彼らと異なり、その眠りが人物の良い性質を映すような主要人物も存在する。それがゲ

イブリエル・ヴァーデンである。彼は滑稽で善良な老人であり、眠りにもその善良さが現れている。例えば彼が初めて登場する際、“a round, red-faced, sturdy yeoman with a double chin, and a voice husky with good living, good sleeping, good humour, and good health” (21) と表現される。“good”という語の繰り返しは彼の善良さを強調し、“good sleeping”という特徴が彼の善良さを示す一つの要素であることは明らかであろう。また、彼はひどく妻マーサを恐れているため、ある日予定に反して家に帰るのが次の日になってしまったとき、びくびくしながら帰宅する。しかし、娘ドリーから、まだ妻が眠っていることを聞かされると、“I’m very thankful. Sleep’s a blessing — no doubt about it” (35) と述べて喜びをあらわにする。慣用表現であるとはいえ、このように小さな理由でも眠りのことを「祝福」と呼ぶ姿は滑稽さをも誘い、彼の人柄が良く現れている。更にこの後、彼は妻の話を聞かずに眠りこけてしまい、妻から大いに非難される。彼は妻の“uncertain temper” (56) に常に困らされており、これもその一例と言える。しかし、そのように悩まされた直後でも、“He dozed again — not the less pleasantly, perhaps, for his hearty temper” (61) と何事もなかったかのように良い眠りを得ている。彼は妻と喧嘩してイライラしていても、すぐに良い眠りを得られるのである。このように、彼の眠りは彼の善良な性質をよく映していると考えられるのである。

ここまで見てきたように、物語の前半部においては様々な主要登場人物が眠りと関連付ける形で扱われ、その眠りは彼らの性質を象徴する役割を果たしている。そしてそれゆえに、眠りが読者の印象に強く残るのである。次章では、この流れが物語の中盤でどう変化するか主眼をおいて考察する。

3. 暴動中の眠り（不眠）

物語が進展し、暴動が発生する段になると、人々の眠りはどうなるか？一言で言えば、彼らの眠りは失われることとなる。暴動が起こること人々

が眠りを奪われる、というのはある意味当たり前と思われるかもしれない。しかし『バーナビー・ラッジ』においては、前章で論じてきたように、暴動前の段階で主要登場人物の多くが印象深い眠りと関連付けて描かれていた。それが暴動に伴い、今度は眠りを奪われる描写が強く現れているとなれば、ディケンズが意図的に眠りを暴動と関連させて描いているということになり、単に「当たり前のこと」として軽んじるべきではない。また、同じ歴史小説の『二都物語』と比較すれば、この描写に意味があることはより明らかとなる。『二都物語』においても、物語の前半（フランス革命以前）には、例えば馬車で眠るロリーが18年間生き埋めになっていた男についての夢を見る場面（*A Tale of Two Cities*, 以下 *TTC* 14-16）や、あるいはカートンがダーニーと会話を交わした後、10時まで眠る際の描写（*TTC* 85-87）など、読者の心に残る眠りと関わるシーンが多い。しかし、革命が勃発したからといって眠りが失われることはなく、例えば革命が小休止する際にはドファルジュラの眠りが細かく描写されているし（*TTC* 228）、またダーニーが連行される際には、一旦“the seeming rarity of sleep”（*TTC* 252）と、街に眠りのない状態が描かれるものの、その直後に眠りが現れ（“Happily, however, there was sleep in Beauvais that night”; *TTC* 252）、一貫して眠りが無い状況が描かれることはない。したがって本作中盤、暴動に伴って眠りが失われるという描写には、本作特有の意味があると考えられるのだ。この章では、ディケンズがいかに人々の眠りが暴動によって奪われる様を描いているかを考察する。

暴動の影響を最初に受けるのは、良い眠りを得ていたゲイブリエル・ヴァーデンである。最初の暴動が起こった夜、彼は自らの徒弟サイモン・タパーティットが暴動に加わっていたという噂を聞き、真偽を確かめるために夜通し彼の帰りを待ち続ける。まずこの事実自体が、暴動が彼から眠りを奪い取っていることを示しているだろう。しかも、ヴァーデン夫人とその召使ミッグズもまた、彼の帰りを待ち続けるのだが、ミッグズは“a constant rubbing and tweaking of her nose”、“a perpetual change of position”

(388) などと、眠たくて仕方がないという兆候を絶えず示す。⁵⁾ この描写によって、一家が本来ならば眠っている時間なのに、暴動のせいで眠れていないことが示唆されているのである。

その後酔っ払って帰ってきたタパーティットは、逃がしてやると言うヴァーデンの申し出を拒絶し、ひとしきり抵抗した末に逃亡する。事態の一部始終を見ていたヴァーデン夫人は、それ以前に自分自身がゴードン卿一派を熱心に応援していたことを後悔し、夫に許しを乞う。それに対しヴァーデンはあっさりと妻を許し、次のように述べる。

'Get you to bed, Martha. I shall take down the shutters and go to work.'

'So early!' said his wife.

'Ay,' replied the locksmith cheerily, 'so early. Come when they may, they shall not find us skulking and hiding as if we feared to take our portion of the light of day, and left it all to them. So pleasant dreams to you, my dear, and cheerful sleep!' (395)

ヴァーデンはこのような非常事態において、妻に繰り返し眠りにつくように勧めている。これは彼の善良さ、お人好しな性質をよく示した台詞と言えるが、もっとも重要なのは、妻には眠りにつくようにと強く勧める一方で、自分自身は店を開けて働き出そうとしていることである。妻が「こんなにも早くにですか！」と驚きの声を上げているように、まだ仕事を開始するような時間ではない。しかも、前夜タパーティットを夜通し待ち続けていたことを考えれば、彼が一睡もしていないのは明白である。したがってここで描かれているのは、暴動が彼の生活を一変させ、彼から完全に眠りを奪ってしまったという事実なのである。この後暴動が終わるまで、彼の眠りが描かれることは決してない。これまで良い眠りを得ていた人物が、このように暴動に伴って眠りを失っているという描写は、本作において暴動と不眠とが密接な関係を持って描かれていることをはっきりと示しているのである。

良くない印象の眠りを持つジョン・ウィレットもやはり眠りを奪われる。彼は変化を嫌い、眠りの中に閉じこもる人物であったが、暴徒たちは彼の目を覚まさせにやって来るのである。まずジョンは暴徒たちがやってくる直前、「暴動など起こっていない」と述べて仲間と喧嘩別れし、長い昼寝をする。

[H]e sat himself comfortably with his back to the house, put his legs upon the bench, then his apron over his face, and fell sound asleep.

How long he slept, matters not ; but it was for no brief space, for when he awoke, the rich light had faded, the somber hues of night were falling fast upon the landscape, and a few bright stars were already twinkling over-head. (413)

引用の後半部分がとりわけ彼の今後に暗い影を投げかけている。暴動前、彼の眠りは変化を嫌う彼の性質を象徴的に表わし、彼にとって変化から目を背けさせるための道具として機能してきた。しかしここで目の覚めた彼が最初に気がつくのは、時間の経過に伴う風景の完全な「変化」である。つまり、ここではもはや彼の眠りは変化を無視させる力を失っていることが示唆されているのである。加えて、“the rich light had faded”、“the somber hues of night were falling fast upon the landscape”といった風景描写は、何か彼にとって不吉なものを感じさせよう。その予感どおり、この直後にヒューに率いられた暴徒たちがメイポール亭に押し寄せてくる。自分のほうに向かってくる暴徒の集団を見た彼は驚きのあまり、“Mr Willet in his consternation uttered but one word, and called that up the stairs in a stentorian voice, six distinct times” (413) と狂乱したように叫び声を挙げる。彼はついに、暴動が起こっているという恐ろしい現実、メイポールが襲われているという現実、そして世の中が変わりつつあるという現実気がついたのである。かくして、彼の眠りと平穏は破られたのである。

眠りを奪われているのは、暴動の被害者とも言うべき彼らだけではない。

興味深いことに、眠りを奪う側の暴徒たち、とりわけ暴徒のリーダーたちもまた、眠りを失っているのである。彼らの場合、暴動の最初からずっと眠れなかったわけではない。暴動の初期段階においては、彼らは確かに眠りを得ていた。例えば最初にロンドンで暴動を起こした後は、“they [Dennis, Hugh, and Barnaby] were fast asleep upon the benches” (383) と眠り込んでいる様が描かれる。また、ゴードン卿の秘書ガッシュフォードの求めに応じ、最初にカトリック教徒の建築物を破壊し終わった際には、“they [Dennis, Hugh, and Tappertit] had eaten, and drunk, and slept, and talked together for some hours” (400) と、眠りに限らず様々な楽しみを得ていた。しかし、彼らに対処するために軍隊が出動し、暴徒の根城ブーツ亭を占領したところから流れが変化する。彼らはバーナビーを後に残してウォレン屋敷の焼き討ちに出かけていた。そしてウォレンを破壊した後、休息を求めてブーツ亭に向かう：“The three worthies turned their faces towards The Boot, with the intention of passing the night in that place of rendezvous, and of seeking the repose they so much needed in the shelter of their old den” (460)。彼らはメイポール亭を破壊したその足で休む間もなくウォレン屋敷の焼き討ちに向かっている。したがって、ここで彼らが求めている“repose”には、単なる休息に加え、「眠り」も含まれていると考えるのが自然だろう。しかしブーツ亭は占拠されているため、そこで休息を得ることは出来ない。その知らせと、バーナビーが捕まったという報告を受けた暴徒たちは、仲間の救出のためにニューゲート監獄に押し寄せ、監獄の破壊という暴動のクライマックスへと向かう。それにあわせてそれまでは描かれていた暴徒たちの眠りもまったく描かれることがなくなり、彼らもまた眠りを失ったことが示唆されるのである。

暴動が過熱化していくと、不眠は更に多くの人々へと広がってゆき、よりはっきりと描かれるようになる。以下は暴動がクライマックスに近づいた段階での街の描写である。

Sleep had scarcely been thought of all night. The general alarm was so apparent in the faces of the inhabitants, and its expression was so aggravated by want of rest (few persons, with any property to lose, having dared go to bed since Monday), that a stranger coming into the streets would have supposed some mortal pest or plague to have been raging. (511)

このように、少しでも何らかの形で財産を持つ市民は、暴徒を恐れて眠れなくなるのである。ここではとりわけ眠りを失った街が、伝染病が猛威を振るう場所にたとえられていることで、暴動の恐ろしさと、眠りのない状態の悲惨さが強調的に描かれている。人々の不眠は、暴動が更に激化することによりはっきりと描かれるようになる。

the reflections in every quarter of the sky, of deep red, soaring flames, as though the last day had come and the whole universe were burning; [...] the stars, and moon, and very sky, obliterated; — made up such a sum of dreariness and ruin, that it seemed as if the face of Heaven were blotted out, and night, in its rest and quiet, and softened light, never could look upon the earth again. (525)

“night, in its rest and quiet” という表現からも明らかなように、夜が再び得られなくなるのでは、という不安は、眠りが二度と得られなくなるのでは、という不安と一致する。これまで見たように、ヴァーデンらの不眠はあくまで「示唆される」形で描かれている。それに対し、ここでの人々の不眠は明確に描かれている。言い換えれば、暴動が広がっていくにつれて、不眠の描写がよりはっきりと読者に伝えられるようになるのである。この段階的な描写の仕方もまた、暴動と不眠とのつながりをよく表現していると言えよう。

興味深いことに、暴徒のリーダーであるヒューやバーナビーが次に眠る時

が、暴動の終結する時なのである。軍隊との戦いの中で傷ついたヒューは、バーナビーとともに静かな場所へ逃げ、そこで「眠り込む」(“fell fast asleep”; 528)。しかし、彼らが次に目覚めるとき、彼らは兵士たちによって捕えられる。暴徒のもう一人のリーダーであった、絞首刑役人デニスが彼らを裏切り、密告したためである。暴動が終わるのが、再び暴徒たちの眠りが描かれた直後だという展開は、暴動と不眠との関連を強く印象づけ、重要と言えるだろう。

このように本作では暴動前においては眠りがふんだんに描かれていたのに対し、暴動の最中は不眠が強調されている。ディケンズが意図的に眠りと平穏、暴動と不眠とを結びつけて描いているのは明らかであろう。次章では暴動後、再び人々に眠りが戻ってきていることを考察し、それによって繰り返しのイメージが描かれていることを示す。

4. 暴動後の眠り

ヒューら暴徒のリーダーが再び眠りを得た時に暴動が終わる、という事実が示唆しているように、暴動が終わると人々は失っていた眠りを取り戻す。まず、一般市民が再び眠りを得る様を見てみよう。

On that warm, balmy night in June, there were glad faces and light hearts in all quarters of the town, and sleep, banished by the late horrors, was doubly welcomed. On that night, families made merry in their houses, and greeted each other on the common danger they had escaped; and those who had been denounced, ventured into the streets; and they who had been plundered, got good shelter. (565)

“glad faces”、“light hearts”、“made merry”といった街の人々の様子を表わした描写がはっきりと、街に平穏と秩序が戻ってきたことを示している。

ここでの明るい描写は、以前暴動中に出てきた、街を伝染病に感染した地域にたとえた陰鬱な描写とコントラストをなしているとも言えるだろう。そしてこれらの明るい描写とともに、「眠りは二重の喜びを持って迎えられた」と描かれ、平穏と秩序の回復と眠りの回復とが密接に繋がるものであることが明確に示されるのである。

同様の描写は他にもある。この後、罪人たちの処刑が行われる前日の街の様子は、“the city slumbered”、“In the brief interval of darkness and repose which feverish towns enjoy, all busy sounds were hushed” (588) と描かれる。以前、暴動中に人々が“night, in its rest and quiet” (525) を得られなくなる恐れを感じるという描写が現れていた。それに対し、この描写からは彼らが夜の静けさと休息とを満喫していることが明確に感じられ、暴動中の街の様子とはっきりとしたコントラストを見出すことが出来るのである。

このように、人々は暴動の終結とともに眠りを取り戻すことになる。そしてディケンズはその事実を強調して描いている。このパターンは、当然主要登場人物にも当てはまる。まずゲイブリエル・ヴァーデンは、長らく暴動によって眠りを奪われていたが、暴動の終結とともに良い眠りを取り戻す。暴徒が完全に鎮圧され、全てが彼にとって良い方向に動き出したとき、彼は満足げに眠り込む。

That afternoon, when he had slept off his fatigue; had shaved, and washed, and dressed, and freshened himself from top to toe; when he had dined, comforted himself with a pipe, an extra Toby, a nap in the great arm-chair, and a quiet chat with Mrs Varden on everything that had happened, was happening, or about to happen [...]; the locksmith sat himself down at the tea-table in the little back-parlour: the rosiest, cosiest merriest, heartiest, best-contented old buck, in Great Britain or out of it. (612 - 613)

“he had slept off his fatigue” という記述が示すように、彼は暴動の疲れを眠りによって癒している。そして目覚めた後、非常に満ち足りた状態になっていることを考えれば、ここで彼が非常に良い眠りを得ることが出来たのは明らかだろう。ディケンズはヴァーデンの状態を表わすために、いずれも良い意味を表わす最上級の形容詞を5つも用いている。この事実は、彼の幸福感や良い人柄を強調するとともに、彼が非常に良い眠りを得た、という事実をも強調するものなのである。

また引用中盤で、“a quiet chat with Mrs Varden” と描かれている点も重要である。これまで彼は常に妻の “uncertain temper” に悩まされてきた。しかしここでの “quiet” という語の使用は、彼女の性格が丸くなったことを示している。実際、夫人は暴動を経て、従順な妻へと変化しているのだ。5つの最上級の形容詞と同様に、ヴァーデン夫人の性格の改善もまた、彼の幸福感と良い眠りを強調しているのである。

一方、ジョン・ウィレットも眠りを取り戻す。しかし、彼の眠りはヴァーデンのそれとは大きく異なっている。端的に言えば、彼の眠りは眠りと言うより、「眠りのような状態」と呼ぶべきものだからだ。暴動の中心地であるロンドンから離れて生活していることもあり、彼にとっての暴動とは、実質的にメイポール亭の破壊という出来事に集約されるのだが、この出来事が彼に非常に強いショックを与えたため、彼は大きく落ち込んでしまう。その結果、彼は以下のような状態に陥ってしまうのである。

John Willet, left alone in his dismantled bar, continued to sit staring about him; awake as to his eyes, certainly, but with all his powers of reason and reflection in a sound and dreamless sleep [...]. So far as he was personally concerned, old Time lay snoring, and the world stood still. (418-419)

ディケンズがジョンの悲劇的な状態を表現するために、眠りに関わる表現を多用している点が興味深い。フレッド・カプラン (Fred Kaplan) はこの状

態を、「自分を守るために一時的に自分を見失ってしまう」状態 (“the temporary loss of self for self-protection”; Kaplan 146) と述べている。また斎藤九一も、ジョンがここで眠りを利用して、大きなショックから本能的に身を守ろうとしている、と指摘している (斎藤 17)。確かに、ここで彼は椅子にくくりつけられているものの、苦痛を感じている様子もなく、また特に悲しみや怒りといった感情も見受けられない (“He [...] felt no more indignation or discomfort in his bonds than if they had been robes of honour”; 419)。それゆえ一見したところでは、これらの批評家が述べているように、眠りのおかげで大きなショックを味わわずにすんでいるように感じられる。言い換えれば、ここでも彼の眠りは、変化を無視する彼の態度と繋がっているように感じられ、物語前半で見た眠りの特徴とよく似ているのである。

しかし、実情は全く異なる。暴動前は、駅馬車がやって来る時間帯に眠り込む、という事例が示していたように、彼は変化を無視するために意図的に眠っていた。それに対し、この場面で彼を眠りのような状態に陥らせた原因は、メイポール亭の破壊という大事件であり、この眠りは彼の意思とは全く関わらないものなのである。

この後も別の箇所から同様のことが強く感じられる。ジョーから結婚するという話を聞かされたジョンは、驚きのあまり以下のような状態になる：“he fell into a lethargy of wonder, and could no more rouse himself than an enchanted sleeper in the first year of his fairy lease, a century long” (603)。「目を覚ますことが出来ない」という表現は、彼自身はこの眠り状態から目覚めたいが、それが出来ないことを示している。そして最終的に彼は物語の最後で、“He never recovered from the surprise the Rioters had given him, and remained in the same mental condition down to the last moment of his life” (633) と描かれ、最後まで眠りに囚われた状態であることが示唆されるのである。暴動前、ジョンは変化を無視し、自らの停滞した世界での安定した地位を保つために眠りを利用していった。しかし、

暴動は彼から眠りと世界を奪い取ってしまい、後に眠りを取り戻すものの、今度はその眠りから目覚めることが出来ず、その中に囚われてしまっているのである。一見したところ、彼の眠りは暴動前も後も変わらないように思われるが、よく考察すれば、それが全くの別物になってしまっていることが分かるだろう。

もう一人のジョン、ジョン・チェスターの場合はより複雑である。暴動後の処刑等も全て終わった物語の最終盤、彼はぶらりと散歩に出かけ、そこで宿敵ヘアディルと出会う。憎しみ合う二人は口論となり、ついには決闘に及び、彼はヘアディルの一撃を受けて致命傷を負う。彼は、一瞬憎しみのこもったまなざしでヘアディルを見つめるが、突如として次のように態度を変える：“but seeming to remember, even then, that this expression would distort his features after death, he tried to smile, and faintly moving his right hand, as if to hide his bloody linen in his vest, fell back dead” (627-8)。彼は死ぬ間際であるにもかかわらず、死に顔がゆがむことを嫌って笑顔を作るのだ。彼にとっては、死すらも偽善の一部をなしているのである。重要なのは暴動前、彼の笑みを浮かべて眠る姿が彼の偽善を体現していた点である。死がしばしば永遠の眠りにたとえられてきたことをあわせて考えれば、⁶⁾ この場面と以前の場面とは結びつき、彼は暴動後、再び偽善的な眠りを得ているとも言えるだろう。もっとも、ここで得ているのは眠りではなく永遠の眠り、すなわち死である。その点ではジョン・ウィレット同様、チェスターもまた、眠りの中に閉じ込められて終わるのである。ただし、これら二人の眠りの変化を悪い変化と考えるのは早計である。というのも、彼らがこのような眠りの状態に陥ったことで、逆に彼らの息子たちは父親たちから解放され、それぞれ理想の相手と結婚し、新たな道を切り開いて生きていくことが出来たからである。

暴徒のリーダーであるヒューやバーナビーも再び眠りを取り戻す。まずヒューである。暴動前、彼の眠りは邪悪なものを感じさせ、見るものを不安にさせていた。そして暴動後も同様のパターンが見られる。彼が再び物語に

現れるのは、デニスが牢獄に入れられ、ヒューと相部屋だということを知る場面である。その時彼は眠っており、“he [...] fell fast asleep again”、“the slumbering figure” (569)、“he was sleeping soundly” (570) など、彼が眠っていることを示す表現が一場面で7回も使用され、彼の眠りが強く印象付けられる。そして眠るヒューを見たデニスは、報復を恐れて怯えるのである (568-9)。しかし同時に、彼の眠る姿を見るにつれてデニスは、“He [Hugh] slept so long and so soundly, that Mr Dennis began to think he might sleep on until the turnkey visited them” (570) と、ヒューが二度と目覚めないのではないかとさえ思い始める。この印象は、永遠の眠り、死のイメージと結びつき、これがそれまでのダイナミックな眠りとは程遠い眠りであることを示している。またヒュー自身も、“it will soon be all over with you and me; and I'd as soon die as live, or live as die [...]. To eat, and drink, and go to sleep, as long as I stay here, is all I care for” (571) と述べている。この台詞からは、彼が自らの運命を甘受し、諦めすら感じていることが分かるだろう。暴動前の眠りから感じた力強さは全くなく、彼の眠りも変化していることが伺えるのである。

バーナビーの眠りもまた印象的である。彼もヒュー同様、牢獄で眠る場面が描かれている。彼は面会に来た母と別れた後、眠り込む (“he sang and crooned himself asleep”; 562)。そして処刑の前夜には、「なんらの恐怖感や悲しみも感じずに」 (“without any sense of fear or sorrow”; 588) 横になる。彼は死刑判決を受けており、これらの場面では取り乱していても全く不思議ではない。実際、同じく死刑判決を受けたデニスが死の恐怖に恐れおののく姿は繰り返し描かれている。しかしバーナビーは何も感じずに眠っている。この事実は非常に非人間的であり、彼が白痴であることと密接に関わっているように思われる。したがって、ここでの眠りは、白痴という特徴を示すという点で、暴動前の彼の眠りと特徴的には類似する。しかし、この後最終的に現れる眠りからは違ったものが感じられる。バーナビーはヴァーデンの必死の嘆願によって処刑をまぬかれ生き延びる。彼によって鍛冶屋の

家に連れて来られたバーナビーは興奮し、荒々しく喜びを発散した後におとなしくなり、母の座る椅子の横で深い眠りにつく（“fall into a deep sleep”；611）。こうして彼は投獄生活の疲れを癒すわけだが、ここで“deep”という眠りの深さを表わす形容詞が用いられている点には注意が必要である。彼の眠りに関して、このような形容詞が使われるのはこれが初めてである。これまでの彼の眠りは全て、彼が白痴であることと結びつき、一種異様な印象を与えるものばかりだった。しかし、バーナビーはここで初めて本当に安らぐ深い眠りを得ている。ここでの“deep sleep”という表現は、彼の眠りの質が変化し、良い眠りを得られるようになった、ということを示唆しているのではないだろうか。確かに最後までバーナビーに知性が戻ってくることはない。しかし、それでもここでの眠りは、彼が父の罪という呪縛から解放されたような印象を与えるのである。

このように、この小説でディケンズは当初様々な人物の特徴的な眠りを描いている。しかし、暴動が始まるとともに、彼らの眠りは描かれなくなり、逆に不眠が強調して伝えられる。そして最終的に暴動が終わると、再び眠りの描写が現れる。いわば眠りに始まり眠りに終わるという構造をしているのだ。無論、常に眠っていたり、目覚めていたりということではない。私が言いたいのは、物語の前半においては眠りが、中盤においては不眠が、そして終盤においては再び眠りが、それぞれ前景化されているということであり、何よりもまずこの構造自体が、彼が描こうとしていた歴史の循環性を強調しているということである。しかも各登場人物の眠りの特徴は、前半と後半で類似しており（違いについては結びで考察する）、この事実もまた繰り返しのイメージ、循環性を強く感じさせるのである。

5. 結 び

以上、『バーナビー・ラッジ』というディケンズの最初の歴史小説において、眠りが構造上暴動とリンクする形で描かれ、循環性を強調していること

を明らかにした。単に歴史の循環性を主張するためであるならば、眠りよりももっと別のものを使ったほうが効果的のように思われるかもしれない。しかし、眠りだからこその循環性をより強く描くことが出来たとも言えるのだ。以下、その点についてまとめておきたいと思う。

既に見たように、この作品は眠りと不眠、新しい眠りという3つの部分からなり、物語の進展に伴い、眠りと目覚めの状態が交互にやってくるという構造をとっている。⁷⁾ ここで言うところの物語の進展とは、当然時間の経過を含むものであるが、『バーナビー・ラッジ』は歴史小説というジャンルであることも手伝って、普通の小説よりも「時間の流れ」が前景化されている。例えば作品冒頭では“In the year 1775”（3）と記述される一方、34章では“early in the year of our Lord one thousand seven hundred and eighty”（249）と描かれるなど、具体的な年号が用いられ、読者には物語内の時間の経過がはっきりと伝えられる。したがって本稿で明らかにした本作の構造は、時間が経過するにつれて、眠りと不眠（目覚め）が交互に現れると言い換えられる。この「眠り－目覚め－眠り」というパターンは、そのまま人間の眠りと目覚めのリズムを連想させるのではないだろうか？ つまり、ディケンズは作品に眠りと不眠を使い分けることで、「歴史の流れ」と「眠りと目覚めのサイクル」、すなわち概日リズムとを結びつけたと考えられるのである。確かに、歴史における暴動はいつ起こるかわからないが、一方で眠りと目覚めはある程度の規則性を持って行われるものである。そのため、この2つをつなげようとしたという考え方は、とっぴなものと思われるかもしれない。しかし逆に言えば、眠りと目覚めが交互に現れるのと同じくらい確実に、歴史の動きもまた静と動の繰り返しを伴うと言えるのではないだろうか？ 作品が人々に再び眠りが訪れて終わっていることは非常に示唆的である。眠りはいずれ覚めるものである。それと同じように、ゴードン卿の騒乱のような暴動も、間違いなくまた起こる。本稿序章で述べたように、ディケンズは「ゴードン卿の騒乱」を描きながらも、実際は彼が作品を執筆している時に起こっていた、「チャーティスト運動」を描いていたと考えられて

いる。それだけに、彼が歴史の循環性を強く感じながら執筆していたのは疑いの余地がない。『バーナビー・ラッジ』に見受けられる眠りと目覚めのサイクルは、ディケンズの循環的歴史観の強い表れなのである。

しかし、ディケンズは単に歴史は繰り返すだけだというペシミスティックな見方を表明していたのではない。それは、眠りの描写が暴動の前後で類似しているように見えて、その実完全に同じではないことから明らかである。前章で指摘したように、暴動前の眠りと暴動後の眠りは、詳細に見るとその中身が大きく変化している。ゲイブリエル・ヴァーデンは、暴動が終わると昔以上に心地よい印象の眠りを得ることが出来る。バーナビーは初めて“deep sleep”を得、これまでの父親の罪を映す呪われた眠りから解放されている。ジョン・ウィレット、ジョン・チェスターは、眠り（に似た状態）の中に閉じ込められ、そのおかげで息子たちは圧制的な父親たちから解放され、それぞれ恋人と結ばれる。そしてヒューは諦めを感じさせる眠りに陥り、その悪魔的な力を失う。つまりこれらの眠りの変化はいずれも良い方向への変化を象徴的に示すものであり、歴史の循環性という観点と合わせて考えれば、歴史は常に良い方向に変化していくという可能性がそこに示唆されていると言えるのではないだろうか？『バーナビー・ラッジ』における眠りの描写は、歴史の循環性を示す一方で、繰り返しながらも一歩ずつ進歩していく歴史の可能性をも示唆していたのである。⁸⁾

注

- 1) ゴードン卿の騒乱とは、プロテスタント連盟の会長ジョージ・ゴードン卿が1780年6月2日にロンドンで起こした暴動事件である。彼は議会でカトリック教徒解放法案の廃止を訴えたが、それが却下されたために暴動を起こした。暴徒たちは多くのカトリック関連の建物に加えてニューゲート監獄までも破壊し、約一週間で軍隊によって鎮圧されたものの、数百名の死者を出すこととなった。
- 2) チャーティスト運動とは、1838年から48年にかけて、成年男子の普通選挙制などを含む、「人民憲章」を求める労働者によって起こされた運動のことである。彼らの運動も過激なデモへと発展し、監獄を襲うなどの暴動へと発展したのであった。

- 3) ここで述べるところの眠り関連語とは、“sleep”、“slumber”、“dream”などを指し、『バーナビー・ラッジ』全体には270回用いられている。例えば“dream”には「将来の夢」というような比喩的な意味も存在するが、それらは全て除外した。また全作品中、眠り関連語の使用回数が最も多く、使用頻度も高い作品は『骨董屋』である。なおこの調査には、*The Victorian Literary Studies Archive*内のHyper-Concordanceを使用した。以下にそのURLを記す。〈<http://www.victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/dickens/>〉
- 4) 原英一もまたこの場面を、ヒューの悪魔的な生命力を表わす場面として挙げている(原14)。
- 5) コズネット(J. E. Cosnett)は医学的見地からこの場面でのミッグズの行動を分析し、これは現在ではよく知られた入眠時によく見られる特徴であると指摘している(Cosnett 264)。ディケンズが眠りに強い関心を持ち、よく観察していたことを示す一例と言えるだろう。
- 6) ボニー・A・キャットー(Bonnie A. Catto)は、文学者は伝統的に死を眠りにたとえ、この伝統は、眠りを死の兄弟、双子と呼んだホメロスまでさかのぼることが出来ると述べている(Catto 424)。
- 7) 不眠と目覚めは違う状態に思われるかもしれない。しかし、*The Oxford English Dictionary*によれば、目覚めの状態(“awake”)とは何よりもまず“not asleep”と、眠りの有無に主眼を置いて定義されるものである。従って、不眠も目覚めも「眠りのない」状態であるという点では共通しており、その点では等しく扱うことが可能である。
- 8) 少なくとも、ディケンズは歴史を後退させるべきではないという考えを持っていた。これは本作の中で、昔は良かったと語るジョン・ウィレットやデニスが否定的に描かれていることから明らかである。特にデニスは暴動の前に、小さな理由でも絞首刑に処された1780年前後の法律を賞賛し、将来自分たちの孫がそのことを懐かしんで、“Those were days indeed, and we’ve been going down hill ever since”(287)と嘆くだろうと述べている。矢次が指摘しているように、そのような恐ろしい時代のことを懐かしく思うことほど憂えるべきことはなく、この台詞をデニスに述べさせていることが、歴史を後退させるべきではないというディケンズの確固たる信念を示している(矢次13)。

引用文献

- Bowen, John. Introduction. *Barnaby Rudge*. By Charles Dickens. London: Penguin Books, 2003. xiii-xxxiv.
- Catto, Bonnie A. “Lucretius, Shakespeare and Dickens.” *Classical World* 80 (1987): 423-427.
- Cosnett, J. E. “Charles Dickens: Observer of Sleep and Its Disorders.” *Sleep* 15.3 (1992): 264-267.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Ed. Donald Hawes. London: J. M. Dent, 1996.

- Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. Ed. Norman Page. London: J. M. Dent, 1994.
- Kaplan, Fred. *Dickens and Mesmerism: The Hidden Springs of Fiction*. Princeton: Princeton University Press, 1975.
- Kincaid, James R. *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. Oxford: Clarendon Press, 1971.
- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Dombey*. New York: Basic Books, 1965.
- Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow*. London: Martin Secker & Warburg, 1941.
- 斎藤九一. 「『バーナビー・ラッジ』論: 「眠り」を中心にして」『名古屋市立大学教養部紀要 (人文社会研究)』23 (1979): 15-25.
- 原英一. 「『バーナビー・ラッジ』と徒弟のロマンス」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』27 (2004): 160-71.
- 矢次綾. 「『バーナビー・ラッジ』における変化と不変——歴史小説家としてのディケンズ」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』28 (2005): 3-14.